

読書の秋 本・本屋・出版を 考える

今年も終盤を迎え、秋も深まってきました。秋は、じっくり読書をするにも良い季節です。街の書店でお気に入りの作家の本や趣味の本を探したり、出たばかりの新書のカバーを眺めたりするのも楽しいものです。街の本屋さんには長年地域の情報・文化の発信地としての役割を果たしてきました。しかし、近年その書店が減り続けています。ITネットワーク技術の発達でコンテンツのデジタル化が進む一方、読者の書籍離れも進んでおり、状況は深刻です。出版業界も長年の不況にあえいでいます。そうした中、独自の取り組みをすることで、健闘されている街中の書店もあります。

本号では「読書の秋 本、本屋、出版を考える」と題した特集を組み、地域においてユニークな事業を展開されている「隆祥館書店」様、「長崎書店」様、「八戸ブックセンター」様の3つの書店と、出版の世界で新たな出版社のあり方を模索されている「英治出版」様の取り組みをご紹介します。

13坪の本屋の奇跡
—闘い、そしてつながる—

二村 知子

01 ●

創業133年 老舗本屋のチャレンジ

長崎 健一

02 ●

八戸市を「本のまち」に
—八戸ブックセンターの試み—

音喜多 信嗣

03 ●

戦略は“自律的な組織づくり”
—先行き不透明な業界で考えてきたこと—

高野 達成

04 ●